

中学校社会科における歴史・公民融合単元の開発とその意義[†] —特設単元「私にとっての現代」の実践を通して—

大嶋 正克*・熊田 禎介**
小山市立小山城南中学校*
宇都宮大学教育学部**

平成24年度からの新学習指導要領の完全実施に伴って、中学校社会科の年間計画・単元構成の在り方が実践的な課題の一つになっている。本研究では、なかでも第3学年における歴史的分野と公民的分野を融合した特設単元(歴史・公民融合単元)「私にとっての現代」を開発・実践し、検討を行った。単元開始時および単元終末時の生徒の作文等からは、①現代という時代は、過去、そして未来ともつながっている(切り離しえない)との気づきが生まれていること、そして、②このような気づきを可能にしたのは、他者を通じた自己の認識の捉え直しであったことが確認された。

キーワード: 中学校社会科, 歴史・公民融合単元, 歴史的問題意識, 現代の捉え方, 他者・自己

1. はじめに

本研究は、中学校社会科(第3学年)において歴史的分野と公民的分野を融合した特設単元(歴史・公民融合単元)「私にとっての現代」の開発・実践し、検討を行ったものである。本稿では、その成果の一端として、本単元の構想・概要を提示するとともに、単元開始時および終末時の生徒の作文等を手がかりに、抽出生徒(3名)による現代という時代の捉え方について検討する。

2. 単元の計画

(1) 単元の構想

本単元は、新学習指導要領社会編の歴史的分野「(6)現代の日本と世界」における「イ 高度経済成長、国際社会とのかかわり、冷戦の終結などを通して、我が国の経済や科学技術が急速に発展して国民の生活が向上し、国際社会において我が国の役割が大きくなってきたことを理解させる」と、公民的分野「ア 私たちが生きる現代社会と文化」及び「イ 現代社会をとらえる見方や考え方」に基づいて設定した。これら歴史的分野、公民的分野とも、内容の取り扱いについては、相互に関連を図ることが求め

られている¹⁾。そこで、本単元では、それぞれの学習内容を統合・再編していくことで、より多面的・多角的な考察や、ゆとりある単元計画のもと、実態に応じて焦点化した学習といった弾力的な運用が可能になるものと考えた。

歴史的分野の学習において、1960年代に代表される高度経済成長期の国民の暮らしぶりやその変化については、現在の中学生にとって遠い過去の出来事であっても、その祖父母らが多感な青少年期を過ごした時代でもある。また、冷戦の終結、バブル崩壊といった1990年代までの時代にいたっては、両親こそが、まさにその時代をリアルに生きてきた証人そのものである。部活動や習い事、塾といった忙しい日常を過ごしている生徒たちにとって本単元の学習は、自らの生活基盤である家庭において、まさに調べ学習が可能な「身近な教材」である。とかく書物やインターネットといった文字資料ばかりを対象とした調べ学習が多い中、実際にその時代を体験してきた人々の「生の声」という素材からも、生徒たちが自ら社会認識を構築していける貴重な機会であるとも考えた。

実施にあたっては、歴史的分野の後半部であり公民的分野の導入部でもあるという教科としての事情と、生徒たちの多くが祖父母とは同居していないという実態を考慮し、夏休みを挟んだ長期の単元計画を立てることで、家庭や地域も取り込んだ主体的な学びが展開していくことを期待した。

[†] Masakatsu OOSHIMA*, Teisuke KUMATA**:
Development and Its Significance of the Fusion
Unit for History and Civics in Social Studies.

* Oyama Jounan Junior High School

** Faculty of Education, Utsunomiya University

（２）生徒の実態・教材との関わり

全体的には男女とも大人しく、おだやかな気質の生徒が多い。一部で個人としての主義・主張が強い生徒も存在するのだが、学級内に同調者を見い出せないためか、影を潜めている様子が窺える。また、授業者が前年度から引き続いて担任した生徒は４名のみで、ほとんどが今年度より受け持つ生徒たちであったことも、相互に関係を構築していくのに多大な時間が必要となる要因となった。

社会科の授業に対する構えとしては、昨年度に幾度か話し合いの学習を実施してきたこともあり、多くの生徒たちが、いわゆる暗記するだけの学習という認識からは脱却してきている。だが、いざ授業に臨むと自ら挙手して発言する者は数名程度しかいない。そのような状況であっても、授業後の感想を書かせてみると、大多数の者が他者の意見をふまえながら、おおよそ自分の意見を書いている。つまり、授業の内容が理解できないとか、興味・関心が薄く授業に参加していないのではなく、単に集団を前にした発言ができない状態にあるということである。

このような実態を踏まえ、本単元では、授業中に生徒たちが自ら積極的に発言していく構えをもたせていくことに主眼を置いた。生徒による主体的な発言が起こるためには、いくつかの条件が必要となる。主な点として、①対教師及び生徒相互の信頼関係、②学習内容そのものへの強い興味・関心、③発言を支える確実な根拠（学習内容を調べてあること）＝自信、④学習内容に対する理解等が挙げられる。①については、本実践に限ることなく、特別活動や道徳の授業、あるいは学校行事といった多様な教育活動全般の中で図られなければならない。勿論、本実践においても話し合いを軸とした授業形態によって、生徒たちが相互に意見を出し合い、受け容れていけるような関係づくりを目指していきたい。②は、個人差が大きいことを認めた上で、両親や祖父母への聞き取りによって生まれる家族・親族とのつながりという関係の中から醸成させていけるものと考えた。③も②と同様、生徒たちにとって身近な関係性のなかから聞き取りによってえられた「事実」が、自信となって発言を支えていくことを期待したい。これらの学習活動が網の目となって、やがて生徒個々の歴史認識や社会認識の形成に寄与していくのではないだろうか。

３．単元の概要

（１）指導方針

単元全体としては、生徒たちが夏休みの課題として調べてきた内容と、それらに対する生徒たちの問題意識によって、以後の学習展開が大きく位置づけられていく。そこで、単元の導入段階においては大きな構想のみを用意し、授業の進度に従ってその都度、教材の用い方や発問等の軌道修正を試みることにした。以下に示したのは、単元における学習過程の概要である。

第１時…単元提示、「作文」

第２時…「話し合い」

祖父母・両親への聞き取りを指示

第３時～第７時…聞き取り内容の発表

第８時…これまでの学習の総括

第９時…発表を行っていない生徒の追加発表

第１０時～第１６時…年表づくり

第１７時…年表の展覧会

第１８時…「話し合い」 60' 70' 年代について

第１９時…「同」 80' 90' 00' 10' 年代について

第２０時…まとめ（「作文」）

では、実際に各授業において、どのような学習が成立していったのか、次節でその概略を辿っていくこととする。

（２）授業の実践

【第１時】（7/12）

「私にとっての現代」という単元名を提示した後、現在自分たちが生活している世の中をどう思っているのかを作文用紙に書くよう指示した。その際、色に例えるならば何色なのかという感覚的な印象をもちながら考えていくことも付け加えておいた。まだ、自分の考えを文章として書くことになれていない生徒たちは、戸惑いながらも何とか短い文章を書き終えた。

【第２時】（7/17）

前時の作文をもとに、各自が表現した色をカード状にして提示できるよう準備した上で、話し合いを実施した。まだ生徒たちは、話し合いに慣れていない。そこで、色という抽象的な考えを提示することによって、相手の具体的な考えを聞き出したいという意欲を駆り立て、互いの「お尋ね」が自然と発生

していくようにした。

結果として、生徒相互による意見の交換は活発に行われた。そのなかで、現状にはある程度満足しつつも、見え隠れする不安材料を意識して中間色を採る意見や、ものごとの善し悪しは観る立場（基準をどこに置くのか）によって変わる事等が提案される。そこで、現代と比較する上でも少し遡った過去を知る必要から、夏休み中を利用して、各自が祖母や両親といった身近な人たちに聞き取りをしてもらうよう提案した。

【第3時】（9/20）

夏休み明けに出されたレポートをもとに、調べた内容の発表会を行った。この時点で提出されたレポート（発表予定者）が24名分あったため、以後発表会は6時間分に及ぶこととなる。発表会の持ち方も教師が主導せず、生徒が相互に聴きたい人を指名し、その後の質疑応答といった進行についても生徒たちの主体性を担保するよう意図した。第1回目の本時としては、現代と比べて30年ほど昔の方が食料や犯罪が少なかったとするKHの発表に対しATとTTが質問をしていく中、次に指名されたMYが、父親からの聞き取り調査でバブル期について語り出す。当時を体験してきたMYの父親にとって、バブル期とは、お金や資源を無駄遣いしてきた悪しき時代という認識が紹介された時、TTが昔、カード集めに熱中した後で無駄だと思えてきたという自身の体験から、当時の視点と今の視点とで、ものごとを見つめる「ものさし」が違ってくことを指摘した。

その後も発表会は、ATによる先が見えない90年代、UMによる70年代の好景気による家電製品の充実ぶり、それを補足する不便な生活ぶりの様子がOYから発表された。

【第4時】（9/20）

変更された時間割の関係で、同じ日の3校時目に行った。KJとSNによる各年代を代表する事件の紹介、FY、WS、TTの家庭環境に即したエピソード（TVのチャンネルを一気に回すと怒られた、水道がないためポンプで水を汲んだ、土曜日にも学校の授業があった等）が紹介され、具体的な出来事や様相が浮かび上がってくる。また、FDの母が関西出身だったため、阪神淡路大震災では人ごとではなかった状態であったことなども明かされ、級友たちの意外な面を知るきっかけにもなった。

【第5時】（9/24）

主な発表内容は、HRの祖父にとって60年代、70年代に印象的だった出来事の紹介、SYの祖母が昭和から平成へと元号が変更されたことによる苦話、SYによる母にとっての60年代、TIの母によるバブル期の様子等。授業後の感想では、オイルショックに纏わるエピソードやグリコ・森永事件といった怪事件への興味や関心が集中していた。

【第6時】（9/26）

授業の冒頭でジャニーズ好きのUKが、ジャニーズ所属タレントに特化した年表を延々と発表して大いに盛り上がる。TYの祖母やSMの両親による80年代の主な出来事や流行、HMの両親による80年代から00年代にかけて世間を騒がせた事件も発表されたが、やはり「こんな調べをしてもいいんだ」という驚きを与えたUKの存在感が際立つ授業となった。

【第7時】（9/30）

ERの両親から聞き取った60～90年代にかけての主な出来事、SYの祖父によるオイルショックのエピソード、OMの母による80年代の音楽・アニメが発表される。特にOMの発表では、この日から授業に交流参加することになった個別支援の生徒が興味を示し、積極的に発言を重ねていく場面が見られた。

【第8時】（10/7）

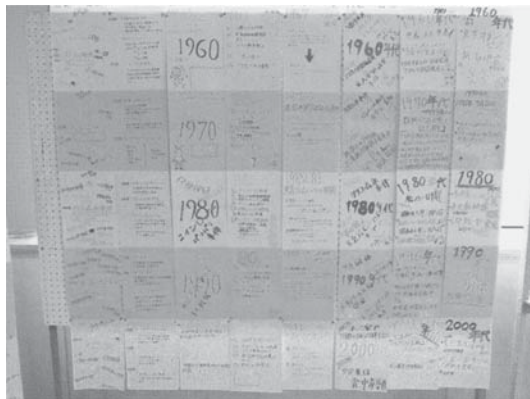
まだ、未発表者が数名あったものの、この日は地区の音楽コンクールに参加していたため、その分を後日に回すことにして、とりあえずこれまでの発表内容を振り返る授業とした。話し合いでは「よくここまで調べてきたなあ」という感心や「みんなで知っていることを持ち寄っていけば、新たな発見がある」「1つ1つの内容をつなげたい」とする発言が出され、今までの授業で生徒たちが相互に関わってきたという自覚をもっていることが確認できる。

また、「同じ内容について学んでも感じ方は人それぞれ」「昔と比べて昔に学ぼうとしている」とこれまでの学習成果をあげる発言も寄せられた。さらに「もっと深めていきたい」「好きなことなら追求していける」「（教室内に掲示してある）年表をもっと増やしたい」（【写真1】参照）等、今後も学習を継続していきたいという意欲のもと、それぞれがテーマをもとに年表をつくってみようという意見でまとまった。

【写真1】教室内に掲示した年表



【写真2】生徒各自が作成した年表(一部)



【第9時】(10/8)

前日に地区音楽祭で不在だったTNとNAの追加発表を行う。両者とも親の生活状況から具体的に70年代の世相を表す内容を述べた。特に、昔の文化やマナーが変化していったという内容について、アメリカ文化の影響から考えようとする発言が述べられる。授業の後半は、それぞれの生徒が、どんな年表を作成するのかを考える時間とした。

【第10時～第16時】

(11/8, 11, 12, 14, 15, 18, 22)

文化祭の影響で1ヶ月越しとなったが、ここから年表づくりの作業学習が始まる。60年代(黄)・70年代(青)・80年代(ピンク)・90年代(緑)・00年代以降(白)というように、各年代における出来事・内容を各色の作業紙にまとめ、仕上げてくることを年表作成上での共通事項とした。

【第17時】(12/3)

完成した年表を1つにつなげて英語室に展示して、一人ずつ大まかな内容を1分程度で発表していた(【写真2】参照)。このような作品作りを経験してこなかった生徒たちは、その壮観さに目を奪われると同時に、個性的な作品や徹底的にこだわった作品など、一人一人の力作に感心と敬意を表す。発表の中で、これまでの技術の進歩を辿った結果から今後の未来を予測したHGの発言には、多くの生徒が授業後の感想で深い感銘を受けた様子を記している。

34人分の年表は内容が多岐にわたるとともに、奥深いものも多いため、残りの時間は個人でじっくり鑑賞し、次回の授業で尋ねたい内容や疑問点などをまとめておくよう指示した。

【第18時】(12/9)

この日は、60・70年代に絞って話し合いを行う。しかし、教材となる34人分の年表は膨大な内容であるため、前時の段階で多くの生徒たちが把握しきれていなかった。そのため、何か話題が上るたびに年表を見に行く行動が頻繁に起きてしまい、思いの外、話し合いの時間が確保できず、生徒たちからの意見も少なかった。しかし、授業後の感想では、今まで以上に他者のまとめた内容や発言をふまえた上での意見・疑問が寄せられる。なかでも多かったのは、昔の方が凶悪な事件や公害問題が多く、技術的な分野も発展途上にある不安定な時代とするもの。そして、ものごとの発展の裏には、多くの苦労や惨劇がつきものであったとする認識をえた様子が窺える。

【第19時】(12/10)

前日に引き続き、80・90・00年以降についての話し合いを行った。この日は、前日のような年表の確認はなかったため、発言が多く出されて盛り上がった。特に、授業の後半で、技術の進歩から従来のものが消えてゆくことの例としてプリクラの存在があげられた。ここで、今まで決して自分から発言をしなかったKHが、プリクラの魅力について力説し始める。多くの作業がコンピュータにとって変わられるなか、KHの発言は、進化していく時代のなかにあって残すべきものもあることを示唆させるものであった。

【第20時】(12/11)

これまでの授業を振り返り、「私にとっての現代とは」という題で作文を書かせた。なかには以前色で表現したことを覚えていて、今回も同じようにするのかといった質問を寄せる生徒もいたが、結論を

出すことだけに囚われると思いが狭くなるのではないか、今回はあえてそれにこだわらず、自由に書いてよいことを伝えた。いずれも単元当初の作文より文章量・内容とも豊かになっている。意欲的なあまり授業時間内には書き終わらせることができず、宿題として書いてくることを申し出た生徒も多かった。

4. 抽出生徒の分析

以上をふまえて、単元開始時および終末時における生徒の作文等を手がかりに、抽出生徒(3名)による現代という時代の捉え方について検討する。

(1) IRによる現代の捉え方

①単元開始時における作文(7/17)

第1時に IRが書いた作文は、以下のようなものであった。

この現代の日本の色は青だと思います。
家電が便利になったり、テレビ放送がデジタル化されたりしたからです。近未来化しているのは僕のイメージは青です。
しかし良くないこともあります。国の借金がふくれ上がっていて、いつ国民が国債を買うのをやめるのか分かりません。国民が国債を買うのをやめたら、お金も外国からお金を借りなければなりませんし、そうしたらギリシャみたいになってしまうかもしれません。まあギリシャは国民の三分の一が公務員だったので日本とは違いますが…。この場合は雲ゆきが怪しいので濃い青色です。僕はけっこう国債のことを心配しています。

②IRにおける変容の契機

このような IRによる現代の捉え方に大きな変容が生じたと思われるのは、年表づくりと発表の後からである。IRは、次のような感想を記している。

(12/3)

前に起きたこと、前に作られたものから未来にこんなことが起きるだろうと言った人がとても興味深かった。

HG君→今は3Dだから今度は4Dだと思う。

ここで端的に表出されているのは、「HG君」の年表とその発表に対する「興味深」さである。HGの年表は、1980年代から2000年代以降におけるファミコンをはじめとしたゲームの歴史をテーマにしたもので、この授業のなかで現在の携帯ゲーム機は「3Dだから今度は4D」になるだろうとの過去・

現在からの未来予測を含むHGの発言に出会い、新たな視座をえたと考えられる。なお、その後の授業におけるIRの感想は、次のようなものである。

(12/9)

60,70年代は大きな事件、大きな進歩など今と比べたらとてつもなく大きい出来事がおきているんだなあと思った。

(12/10)

80年代、90年代、00年代でまとめると:技術が急激に進歩したということではないかと思います。プリクラの良さが、楽ということしか伝わってこなかったの今度、利点をきいてみたいと思う。

③単元終末時における作文(12/11)

そして、IRは、第20時において、以下のような作文を書いている。

私にとって現代とは、八十年代、九十年代、二〇〇〇年代、十年代です。なぜかという、技術がとても発達してきているからです。私にとって現代とは技術が発展してきている時代です。八十年代には、ファミコンが登場したりコンピュータが登場したりと何かと新しい物が生まれてきました。そして九十年代、二〇〇〇年代、十年代では、八十年代に新しく生まれた物をアレンジしたり、性能を良くしたりして発展していきました。

現代は積み木を積み上げられたようなものとも考えられました。進歩や出来事=積み木でそのことが積み重なってできたものだと思います。八十年代の積み木がないと九十年代、それ以降の年代では新しい積み木は生まれません。ですから私にとっては発展していつているのが現代、過去の進歩や出来事によって成っているのが現代だと思います。

ここには、本単元の学習を通して、IR自身が深化させてきた現代という時代の捉え方が具体的に表れていると考えられる。

それはまず、1)私(IR)にとって現代とは、1980年代以降 2010年代までのことであり、それ以前の1960～1970年代とは異なるとのIR自身の時代の捉え方(時期区分)である。そして、2)1980年代はファミコンをはじめとして「何かと新しいものが生まれ」た時代であり、1990～2010年代はそれを「アレンジしたり、性能を良くしたりし」た「発展」の時代として捉えられている。さらに、3)以上のような時代認識に基づいて、「発展していつている」一方で、これまでの「進歩や出来事=積み木」が積み重なって出来上がってきたのが現代であるとの見方が提示

されている点は特筆すべきであろう。

(2) T Tによる現代の捉え方

①単元開始時における作文(7/17)

次に見るのは、T Tによる第1時の作文である。

僕は灰色だと思います。なぜなら上下関係や、周りとのつきあい、他からの評価にもまれ、自分が行いたいことや思っていることを表現できず、まわりへのみこまれて、ただただ時間だけが過ぎていようだからです。

単元開始時における作文ということもあり、記述量も少ないため、その内容・文脈については類推する他はない。しかしながら、ここではT T自身の周りを中心とした現在の人間関係から現代という時代を「灰色」として捉えているものと推察される。

②T Tにおける捉え方の足場

本単元のなかで、T Tによる捉え方として注目されるのは、夏休み中における祖父母・父母への詳細な聞き取りをふまえた次のような感想である。

(9/20)

僕が思ったことは、祖父母の年代の人はやはり戦争のいんしょうが強いようです。上の感想をみると、戦争は悲しいいんしょうが強いらしい。戦争を僕たちは直接経験していないが、祖父母の話聞いて、沖縄など少なからず今の生活にえいきょうしているのだなと思いました。僕は戦争を望まないが、このような戦争の体験を聞くと、この時の体験談や情報はしっかり残しておくべきと思いました。

(9/20)

僕が思ったことは、父母の時代は高度経済成長、バブル等が終わり、比較的安定して、いろいろなおもちゃ等が流行していたらしい。

T Tによる聞き取りは、祖父母が実際に生きてきた戦時中から戦後にかけての生活や仕事の様子等、多岐に及んでいる。そのなかでも「戦争のあとに思ったことは、戦争をしきした人がはやく終えてくれれば、原爆や東京大空襲がなかったと思うと残念なそうだ」、「現在も沖縄などの問題が続いているのがかなしいらしい」といった祖父の思い(「上の感想」)にふれたことが、沖縄をはじめとした現在の生活への少なからぬ影響や戦争の体験談・情報をしっかり残す必要性といった記述につながったと思われる。また、父母への聞き取りでは、「土曜日にも授業があった」ことのほか、フラフープやローラース

ケート、ガンブラといった「いろいろなおもちゃ等が流行していた」ことから、それが「比較的安定」していたとする時代認識につながっている。なお、その後の授業におけるT Tの感想は、次のようなものである。

(12/9)

60,70年代は発てんの中であつていろいろと安定しなかつた時代だと思つた。そして安定してないので、マンガ、テレビなどが発たつてして理そうをもとめるようになったのではないのかと思つた。また赤軍のそんざいなど、社会がまだまとまつておらず、そのために事件などが多くなつたのではないのかと思つた。

(12/10)

ブリクラ、ディズニーなど、ごらくを提供するものがあつていつたが、80年代は大きな犯罪が多い気がする。もちろん2000年代は今生きてゐるから気づかないが、未来から見たときは凶悪だと受け取られる犯罪が多いのかも知れない。このことから十年二十年は、人間歴の中では短いと思つてゐたが、この期間で社会の考えは変わつたと思つた。

③単元終末時における作文(12/11)

そして、T Tは、第20時において、以下のような作文を書いている。

僕は、現代は以前書いたように、スモッグばかりの仮面の町のような気がするのはいりますが、これまでの学習から、昔より良くなつてゐる面もあると思つた。

なぜなら、2000年の前は、むごたらしい殺人が多いような気がするし、オイルショックとか本当にものがないということを僕は経験してないからです。ですが、たしかに今は昔よりよい気がするのですがまだまだだめなところは多いです。例えば朝ニュースでやつてゐましたが、JR北海道のせんろの検査データのかいざんこれは、周りに良く見せようとするスモッグですし、昔ほどでないしろ、世界金融危機もありました。そして、僕がこのことから思うことは、時間は進むので当然といえば当然ですが、昔から未来へ向かう途中です。ただ、その未来とはどんなものか、よい未来とはどんなものか、地球温暖化など世界きばでとりくまないとはいけない問題がある中で、現代の行動は重要だと思つた。世界の人々がスモッグからぬけだして、それぞれの役割をしっかりとこなせば、僕の思うよい未来が来ると思つた。

ここでは、1) T Tのなかで単元開始時において「灰色」の時代としてゐた現代に対する捉え方が、「これまでの学習から、昔より良くなつてゐる面もあると思つた」と見直されている。また、2)その契

機となったのが、「これまでの学習」、すなわち、先に見た夏休み中における祖父母・父母への聞き取りや年表づくり・発表、話し合い等の学習活動であったことが分かる。そして、その結果として、TTは、3)現代という時代(「今」)は「昔よりよい気がする」ことを根拠にしながら、同じように現代も「世界の人々がスモッグからぬけだして、それぞれの役割をしっかりとこなせば」今よりも「よい未来が来る」と展望するにいたっているのである。

その意味でも、12/10の「もちろん2000年代は今生きているから気づかないが、未来から見たときは凶悪だと受け取られる犯罪が多いのかも知れない。このことから十年二十年は、人間歴の中では短いと思っていたが、この期間で社会の考えは変わった」との感想等²⁾からは、それぞれの時代に対する捉え方は、その人がおかれた時代・社会や状況、立場等によって異なってくるとの見方が示唆されているようで大変興味深い。

(3) HMによる現代の捉え方

①単元開始時における作文(7/17)

最後に見るのは、HMによる第1時の作文である。

今の日本を色で表すと「白」だと思います。白ってどの色にも染まるじゃないですか。多少、薄くなりますけど。そういう意味で、国民を自分の色に染めようとする政治に似てと思ったので白にしました。(中略)染まってみて合わなかったら別の色に染まる。絵の具の白みたいと思いました。それに結局白も染まりきることはできないじゃないですか。(薄くなるので)染まり切れないから自分で選んだ政治家を最後まで支持できないんじゃないかと思いました。それにファッションやお笑いだってあきるとすぐに他のものに移るじゃないですか。都合の良いときだけ染まって悪くなるとすぐ別のものへ。(←私も人のこと言えませんが。)現代の日本って自分自身を貫き通す意志がないから色々なものに染まっていくのではないのでしょうか。という訳で現代の日本の色は「白」だと思います。

②HMにおける変容の要因

後述するように、このようなHMによる現代の捉え方に大きな影響を与えていくのは、聞き取りや年表づくり・発表、話し合いを通した級友たちによる見方・考え方であったと思われる。それを示すように、HMによる授業後の感想には、グリコ・森永事件(9/20)や三億円事件(9/24)、インバーダーゲーム(9/24)等、授業時間内に発表され、話し合われた各

年代の出来事や事象に関する質問や言及がなされているのが看取できるのである。そして、それはその後の授業後の感想にも引き継がれていく。

(12/9)

今日はあまり積極的に授業に参加できなかったで、次回はちゃんと参加できるようにしたいです。私にとっての60-70年代は、「成長」の時代だと思います。そして、オリンピックや新幹線、万博、テレビなど、戦後の人々に夢と希望を与えてくれた時代だと思います。楽しんだ分、公害で苦しめられましたが…いろんな意味で成長したのではないのでしょうか。

(12/10)

今日の授業はおもしろかったです。プリクラの存在意義の答えはよくわかりませんが、人々が「楽しかった」という思い出や事実をかんたんに残すためにあるのではないかと思います。写真とは一味違うプリクラの良さがあるから、人々が利用し、プリクラの技術も向上^{ってことは}→今も人気。ってことなんじゃないかなあーと思います。

③単元終末時における作文(12/11)

その上で、HMは、第20時において、以下のような作文を書いている。

私にとっての現代

改めて私にとっての現代は過去に感謝しないといけない時代だと思います。これまでの授業でたくさんの意見を聞き、今、便利があたり前の世の中ですが、それは今まで技術を向上させようと頑張っていた人がいるからなのではないかと思うようになりました。

プリクラ、ゲーム、新幹線、アニメ、漫画など、今はあたり前のものが昔にはなかった。^{ということば}→楽しみや便利を求めて様々なものの開発や技術の向上をした→公害が起きる→環境のことも考えないといけないと学習する→昔の人の努力→今へつながった。もし昔が今くらいに便利なものがあふれていたら、きっと今はその時と変わらず、研究授業をやる面白さもないと思います。

今、便利なのは、昔の人の頑張りのおかげであったからだと思います。だから、今、残っている昔の人の発明品を未来に残してあげるのが今の私にできる昔の人への恩返しなのではないかなあと思います。

ここにいたり、1)HMにとって「改めて」現代とは、「過去に感謝しないといけない時代」として捉え直されるようになる。また、2)それは取りも直さず、聞き取りや年表づくり・発表、話し合いを通して級友たちの「たくさんの意見を聞」くことによっ

て生まれた捉え方であり、そのことによって、HMは「今、便利があたり前の世の中」を形づくってきたであろう「今まで技術を向上させようと頑張っていた人」の存在に気づくのである。そしてそれが、3)過去には「プリクラ、ゲーム、新幹線、アニメ、漫画など今はあたり前のものが昔にはなかった」に始まり、以下、「今へつながった」とする一連の因果関係によって説明・表現されており、M自身による現代の捉え方、その思考の筋道の一端を伺い知ることができるのである。

5. おわりに

本単元の開発と実践は、現在における子どもたちの歴史意識、なかでも歴史的問題意識³⁾を探るための一つの試みでもあった。長期に及ぶ単元を展開していくなかで見えてきた課題とともに、授業の検討を通して再確認された点も多かったと考える。

以上で見た3名の抽出生徒の分析からは、①現代という時代は、過去、そして未来ともつながっている(切り離しえない)との気づきが生まれていることが確認できる。すなわち、IRにとって現代とは「進歩や出来事＝積み木」が「積み重なってできたもの」であり、またHMにとってそれは「過去に感謝しないといけない時代」であった。さらに、TTによれば、現代とは「昔から未来へ向かう途中」であり、だからこそ「良い未来」のために「現代の行動は重要」であると捉えられている。

そして、②このような気づきを可能にしたのは他者を通じた自己の認識の捉え直しであったと考えられる。たとえばそれは、先に見たIRにとってのHGに代表されるように、級友の存在やその見方・考え方との出会いである。また、HMも級友による聞き取りや年表づくり・発表、話し合いを通して「たくさん意見を聞くことで、「昔の人」と出会いその「頑張り」に思いをいたらせている。それだけではない。TTにとっては、夏休み中の聞き取りを通して、戦時中から戦後当時を生きてきた祖父母や高度経済成長後に青少年期を送った父母の生活や思いに出会ったことが一つの契機となって、自己の認識を見つめ直していったのではないだろうか。このように、本単元の学習を通して、生徒たちは多くの他者に出会いながら、自らの現代に対する捉え方を再構成していったと考えられるのである。

1950年代以降、盛んに取り組まれた歴史意識に関

する調査・研究から久しいが⁴⁾、本研究を通して、改めて現在の子どもたち一人ひとりの内にある歴史意識の内実を丁寧に掘り起こし、探っていくことの重要性が再認識された。この点を含めて、社会科としての歴史学習の在り方を、実践を通して考究し続けていくことを今後の課題としたい。

註

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』(日本文教出版, 2008年)
- 2) これに先立って、TTによる9/20の授業後の感想には、「多くの人々にそれぞれが体験したことをきいたので、同じ事でも食いちがいが出ていた。なぜ食いちがいが出てくるのかが気になる。同じ年代でも、生活などには地域によって差が出ていたようです。僕たちが生きている今も、差が出ているのかと思うと、いろいろなことをけいけんして差をうめないと時代におくれてしまうと思った」とある。
- 3) 横山十四男は、歴史意識を「歴史的問題意識という意味に限定」した上で、それは「多分に個性的、主観的であらざるをえず、しかも心的情動というような性格をも」ち、「個々の生徒の生活経験を基礎とし、それに科学的な歴史知識が加味されて形成されるもの」としている(「歴史意識・歴史的思考力の育成—小・中学校の関連をふまえて—」平田嘉三編著『歴史の授業を掘りさげる』黎明書房, 1971年)。
- 4) 木全清博「歴史意識」(日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』, 2012年, 134-135頁)、桐谷正信「歴史的思考力」(『同書』, 158-159頁)等を参照されたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、研究授業の実施に際しては、川又俊郎校長先生をはじめ、下野市立石橋中学校の先生方に多大なご協力をいただきました。謹んで謝意を表したいと思います。